5　小結　－古代中国における食生活等の変遷とその画期－

戦国晩期　戦国晩期は、殷周銅器の終末を告げる一方で、漢代以降に展開するいわば日常的な銅器の母胎を形成した一大画期であった。供膳具では簠・敦あるいは有蓋豆、注器では酒用の盉などが終わる。煮沸具の甗・鬲は中期でもやや遅れた時期には消失した。把手付杯Ⅰ類、食べ物などを盛った深鉢Ⅰ類、煮沸具の鋬はやや早く戦国中期頃に登場しているが、戦国晩期には新たに碗や高台付鉢、瓶、盉に替わる鐎壺、鍋類、鍔付きの釜それに蠟燭用と推定される針付きの豆燈や薫爐などが登場してくる。碗・鉢・瓶などの出土例が極めて少なく、銅器でないものも含む点は、先駆的状況といえる。

なお、筷（箸）、叉（フォーク）、匕（匙）、長手の勺（杓子）は戦国早期には出現しており、短い勺（散蓮華）も秦代には登場している。筷は食べ物を挟みとるもの、匕は五穀を食すもの、短い勺は羹・粥用とみる説が有力である。

前漢・新代　前漢・新代は、それでもなお残っていた殷周銅器の伝統が消失し、日常的な銅器類が次第に定着した時期である。このなかでの画期は、以下にみるように後漢晩期にある。古制を伝えるものでは、碗の祖型とされる簋が前漢早期、楕円形の鉢である舟は前漢中期、貯蔵具の瓿は前122年頃、長胴壺Ⅰ類は前漢晩期、煮沸具の鑊は前漢晩期頃、無蓋鼎は前122年頃、水器の鑑や浴鉢、浴用の可能性が高い超大型の大盤Ⅲ類も前122～113年までに終わる。高足杯Ⅰ類、有蓋鼎、鈁、提梁壺・筒などは、前漢晩期には激減する。「沃盥の礼」に用いた匜は新代に途絶え、大盤Ⅰ類A・Bも前漢晩期には数が極めて少なくなる。大盤Ⅱ・Ⅳ類も前漢代までに終る。扁壺は形をかえながら細々と以後も残るが、俵形壺は前漢中期までにすたれる。

新しい器種・器形は以下の如くである。飲器は、中国南半部で把手付杯Ⅰ類が盛行するが、新たに前漢晩期から把手付杯Ⅱ類が加わる。出土例は多くなく、新器種の高台付杯Ⅰ・Ⅱ類がこれを補ったと推測する。新代に登場する高台付杯Ⅱ類は、前漢晩期に登場する「酒鑪」の小型品。両者が一組とすると、高台付杯Ⅱ類は飲酒用、酒鑪は酒を壺などから一時的にうけたもので、高台付杯Ⅱ類の出現も前漢晩期と推測する。碗のうち、新代に登場する浅目の丸底碗Ⅱ類は、後の事例によると勺（散蓮華）を伴出し、羹・粥用の可能性がある。穀類を食す容器は古くは簋であったが、前漢晩期から類例を増す高台付碗Ⅰ・Ⅱ類以外にそれにあたる容器は見当たらない。出土例は少なく、個々人の銘々器にまでなっていたとは言い難い。耳杯は、形を変えながらも前漢以降も存続し、後漢には鶏骨が残る例もあることから、飲器だけでなく、小盤としても利用されたとわかる。小・中盤はまだ数が極めて少ない。前漢代の特徴は、大盤Ⅰ類A・Bの多さである。既述した沃盥の礼器以外に、爐の下盤などにも利用されているが、食べ物を盛る器としても用いられたと推測する。中盤Ⅴ類は杯・碗を承ける下盤であり、そうした風習が前漢晩期までには生まれていたことが知れる。前漢晩期に登場する魁は、絵画資料から、把手をつかんで筴・箸でなかの食べ物を食べたもの。主人に食べさせる様だが、自分で食べることもあったであろう。後漢から盛行する。既に触れたように、陶製の蓋付き大口罐には「飯」の墨書があることから、新代にはおひつがあり、以後も存続したこと、漢代の中盤Ⅰ

類Ｂで、口径27㎝程のものは、墨書から一時的にせよ飯を盛ったことも知れる。なお、前漢には筷、匕、長・短両種の勺の出土例が増加し、食べ物を挟むための、Ｕ字状にまげた筴や肉を刺すための大型の叉も加わる。

瓶は、戦国晩期からの蒜頭瓶が前122年頃まで残るが、前漢中期には反口瓶Ⅰ類、晩期から直口瓶が登場する。直口瓶には矢柄らしきものが残るものがあり、矢を投げて遊ぶ風流の一端が知れる。また、反口瓶は後の事柄から、花瓶として用いられた可能性もある。ただし、そうした用途だけではない。これも後の事例だが、洗の上に反口瓶をのせた例がある。洗は前漢晩期頃に登場する。浅洗Ⅰ・Ⅱ類と深洗Ⅰ・Ⅱ類が一組で、浅洗は手足を洗った水をうけ、その汚水を深洗にいれて棄てたと推測できる。前漢晩期の湖南・長沙出土例からすると、浅洗に注ぐ水の容器は球胴壺だが、洗の出現と期を一にして直口瓶や細頸壺Ⅲ類が出現していることは注目してよい。これは、匜と大盤Ⅰ類Ａ・Ｂや超大型の丸・平底鉢を用いた「沃盥の礼」に替わって、官人の加冠や婚礼「士冠礼」「士婚礼」などに用いられた礼器の具体像を示すものといえる。

煮沸具では、釜・甑は出土例が増加し、普及したことが知れる。釜では鍔付きのⅡ類が主流である。長胴釜Ⅱ類と球胴釜Ⅱ類を伴出する例があることからすると、蒸す物による使い分けがあったとも推測される。そして、釜甑で蒸した食物を盛ったり、調理・炊事にも用いた盆が新登場し、鋗も浅鋗と深鋗と備えるようになる。中国南半部では釜・鍋兼用の鍪なども盛行する。釜とともに鍋Ⅰ～Ⅲ類や片手鍋も前漢から多くなる。これは鼎の衰退と表裏一体で、竈の完備によって、必ずしも三脚が必要でなくなったことによる。温・注酒器の盉の伝統をひく鐎壺は三脚器として残る。前漢初からは、新たに鐎尊と「温酒樽」が登場する。前者は羹類、後者は酒を温めるもの。既述のように、絵画資料では宴席に共用器１対として描かれており、接待などに特別に用いられたと推測する。

油・蠟燭用の燈、香を焚く薫爐も前漢では出土例が著しく増加し、バラエティに富む。新しくはアイロンの熨斗も前漢晩期に出現し、以後に定着する。

後漢　後漢は、前漢晩期に登場した新器形・器種が定着した時期で、鉄鉢形や唾壺などが新登場するが、後漢代での小画期はない。飲器は、中国南半部では把手付杯Ⅰ類が存続する。高足杯Ⅰもわずかに残り、新たに丸底の把手付杯Ⅲ類が登場するが、出土例は少ない。高台付杯Ⅱ類が主で、それを平底杯Ⅲ類が補ったのであろう。耳杯はⅡ類に変化するが、飲器として、また小盤としても機能した。碗は浅目の平底碗Ⅱ類が登場し、後の事例から、羹や粥用の食器として用いられたらしい。高台付碗はⅠ・Ⅱ類が変化しながら存在し、出土例もやや増加する。飯器と推定する。中・小盤は、杯や碗おそらく主に杯の下盤となったⅤ類が盛行する。Ⅵ類は浅い半球状の盤で、その数がやや増加することは、取り皿として意識されてきたことを示そう。後漢晩期の絵画資料では、主人の前に置かれた盤には食べ物がのり、筷がそえられており、様子が知れる。大盤はⅠ類Ｂが後漢で終わる。新登場のⅤ類は、食器類をのせた円案（お盆）である。方案は前漢にあるが、円案は後漢に入って登場するようである。豆は後漢ですたれる。盒はⅠ類が前漢晩期頃までに、Ⅱ類も後漢晩期までには終焉を告げる。後者には果実の核などが残る。化粧用の盒とは性格を異にし、食べ物をいれる容器としての盒の終焉と推測する。後漢晩期に新しく登場する鉄鉢形は、以後長く存続する。その用途については、仏教的色彩を考

えるのが通例で、隋代の絵画資料でも僧が小型の鉄鉢形らしきものを手にする。底が丸底風であることからすると鍋的であるが、食物を盛ったり、ときに飯器として多様な機能を果たしたものと推測される。これに似て内弯の度合いが強い盂は、後漢に出土例が増え、水盂と呼ばれることが多い。三国時代のミニチュア例では勺（散蓮華）を伴ったものがあるが、実際にどのように使われたのかは明かでない。今後の課題としておく。

前漢晩期頃から盛行した直口瓶は、後漢では出土例が少ないが、反口の細頸壺Ⅰ類Cや盤口のⅢ類Aがある。洗は、深洗Ⅰ・Ⅱ類と、これとセットになる浅洗Ⅰ・Ⅱ類が備わってくる。手足を洗う礼器はなお存続したと判断できる。

壺類は、前漢代にはバラエティがあったが、後漢にはシンプルとなる。長胴壺はⅡ類だけがあり、以後も存続する。短胴壺は下肥れのⅡ類やこれに提梁をつけたものが主に中国南半部に残る程度で、それも後漢晩期にはほぼ終わり。儀器（明器）化する。後漢晩期に登場した壜もⅠ類も後漢晩期で終焉する。貯蔵用の壺は、三国時代には新しいもの（盤口のⅢ類）にかわってしまう。

煮沸具は、鍋Ⅰ～Ⅲ類、鍔付きの球・長胴釜Ⅱ類、それに鉄製の長胴釜Ⅲ類が盛行する。把手付鍋は後漢晩期、鼎の遺制である特異な三脚鍋、それに三脚釜もほぼ後漢晩期までに終わる。釜・甑とセットであった盆は後漢早期には消失し、鍑がその機能を兼ねるようになる。後漢に新登場するのは、三脚・把手付の鍋である鐎斗。以降は鍋の代表的な位置を占める。宴会用の鐎壺・温酒樽は後漢晩期でほぼ終わる。

雑器としては、後漢中期から、定型的な唾壺Ⅰ類や虎子が出現・普及し、生活様式に一つの画期を示す。

三国時代～東晋　三国時代は漢代の遺制が途絶えた時期で、新しくは短胴罐Ⅳ類や爐Ⅱ類が出現した程度で、過渡期といえる。西晋や東晋では、以下のように、杯・碗・鉢・壺類などが一新され、西方からの新しい波及の予徴がある。漢代に比して銅器の出土数は激しく減少する。古墳へ副葬されなくなったり、明器となったりしたためで、陶器や瓷器などで補って復元せざるを得ない。

飲器は、高足杯Ⅰ類や把手付杯Ⅰ・Ⅱ類が三国時代にわずかにある程度。耳杯は舟状に両端が反るⅢ類にかわる。きわめて出土例は少なく、儀式的なものになったと推測する。舟状であるのは、飲器専用で、小盤を兼用することはなくなったことを示す。陶・瓷器では、杯・碗・鉢は相似た器形で寸法の異なる平底で浅目のⅢ類が三国時代から東晋初頃まで展開する。西晋末～東晋初に高台付で浅目の杯・碗Ⅲ類に変わる。平底杯Ⅲ類は新代に出現しており、これをもとに碗・鉢とのセットが完成され、飲食用の主体になったと推測される。鉢はそれ程変化がないが、西晋末～東晋初には高台付の浅目の杯・碗Ⅲ類に変わり、さらに東晋晩期には高台付の高目の杯・碗Ⅳ類Aが登場し、南北朝の先駆となる。高台付杯Ⅲ類には銅器（北燕415年の馮素沸墓例）があり、これには托Ⅰ類が伴う。専用托の始まりである。馮素沸墓では、この時代ではごく稀な小型提梁壺が出土し、これで酒を温めて高台付杯Ⅲ類で飲んだと推定している。銅器には古調が残り、口縁が外反する高台付碗Ⅱ類は三国時代には終わる。平底碗Ⅱ類らしき銅器は三国時代にあり、銅勺（散蓮華）を伴出。高台付鉢Ⅱ類は東晋にも細々と存続する。特異な小型の丸底鉢Ⅳ類Aはガラス器で、これを模した可能性がある瓷器の小平底の鉢Ⅳ類は、

西・東晋代の限定品である。後者は蓋を伴い、食器かもしれない。魁も存続する。三国時代からは、菓子などを盛り分ける果盒が登場し、食卓が華やかとなった。この時期の特徴は大盤が見当たらず、小盤Ⅴ・Ⅵ類Ａの出土例が増加する点である。Ⅴ類は主に下盤、Ⅵ類Ａは主に取り皿としての役割が固定されてきたと推測する。中盤では有脚盤Ⅰ類が西・東晋に限って存続する。硯・爐とする見方があるが、底が平坦でやや深目のものがあったり、蓋を伴うものもあり、盤の可能性が高い（Ⅰ類Ａ）。これが韓半島の百済などで盛行する三足器の祖型になったのであろう。

瓶や細頸壺の出土例は少ない。洗は深洗が三国時代頃まででですたれるが、浅洗Ⅱ類は銅器がかなり出土している。南北朝後半には浅洗の新器形と瓶とが共伴しており、礼器の伝統はつづいたと推測する。壺は瓷器だが、球胴・長胴とも盤口のⅢ類が西晋に出現して盛行する。銅器は確認できていない。盂に似て短頸の短胴罐Ⅳ類も三国時代～東晋に盛行する。水や酒をいれた容器かもしれない。

温・注酒器である鐎壺は三国以降にも極わずかに残るが、それも小型・儀器化する。かわって注壺や有柄注壺が登場し、以後盛行する。後の事例からみても、これらに酒用が含まれていたとみて誤りはない。大きく二系統がある。肩に筒状の注口をつける注壺Ⅲ類と、片口にする注壺Ⅳ類がともに西晋晩期頃に限って存在する。これらに把手をつけた有柄注壺Ⅲ類Ａ・ＢとⅣ類Ａ・Ｂは東晋に入って出現し、以後にも展開する。いずれも三脚はつかない。架（五徳）や温水をいれる容器も見当たらないことから、酒は温めなくなったのかもしれない。これらのうちⅣ類は数はまだ少ないものの、新疆・遼寧から出土しており、西方からの新しい影響を示す。後に触れるように、ワイン用と推測できる。

鍋・釜・甑は、墓への副葬することがほとんどなくなり、実態はほとんど不明。唯一、鐎斗は形をⅡ・Ⅲ類に変化させながらも存続する。鐎斗に注口をつけたⅣ類も三国時代から登場し、煮沸具の代表のようになる。中国北半部では伝統的が鍑Ⅱ・Ⅳ類が存続し、北朝にも残る。三国時代から登場する、内爐を伴わない円爐Ⅱ類Ａ・Ｂは、主に鐎斗とセットになる。瓷器では鐎斗を円爐Ⅱ類上においたものがあり、爐に炭火をいれ、鐎斗を温めたと知れる。

アイロンの熨斗は、Ⅱ・Ⅲ類が盛行。燈は古式の豆燈Ⅰ類ＢやⅣ類、盞燈Ⅰ類ＢやⅡ類が残り、蠟燭用Ⅰ類も東晋晩期頃まで存続する。唾壺はⅡ類Ａ・Ｂが盛行、虎子も虎型のⅡ類が盛行し、それぞれ生活に定着したことを示す。

南北朝時代～隋　南北朝時代前半の５世紀代は、西方から高足杯Ⅱ・Ⅲ類や曲長杯、大盤Ⅳ類Ｂなどが及ぶとともに、高台付杯Ⅳ類と碗Ⅳ類及び托のセット、反口瓶Ⅱ・Ⅲ類など登場してくる。西方からの器物は鍍金銅器を主とするが、出土例は多くなく、中国縁辺部や北朝域に限られる。南北朝後半の６世紀前半は、これらが発展・定着し、加えて以下のように新しい器種・器形が生まれた画期、隋代は唐代への過渡期といえる。隋代かその直前頃には、新器形の稜杯・花碗が中国縁辺部で登場し、他は細頸壺Ⅳ類と豆燈Ⅴ類Ａが出現した程度である。飲器では、高足杯Ⅱ～Ⅴ類が南北朝前半の５世紀後半にも出現して、一部は隋代に継承される。ほぼ同じ頃に、曲長杯、盤状高足杯、把手付壺形杯、片口の有柄注壺Ⅳ類Ｃも登場する。銀器もあるが多くは鍍金銅器で、ササン朝ペルシャの影響とみている。有柄注壺Ⅳ類と高足杯は、既述した北周の絵画資料から組み合い、ワイン用と推定される。他の飲器もワイン用の可能性が

ある。

高台付杯Ⅳ類は、5世紀末頃にⅣ類B、6世紀中頃にⅣ類Cと順次高いものが登場するが、低目のⅣ類AそしてⅣ類Bも以後に存続し、一基の墓で2・3種伴出する場合も少なくない。これと対をなす高台付碗Ⅳ類は大きな変化がない。高台付碗Ⅳ類が飯用、高台付杯Ⅳ類が飲用とみてよいであろう。高台付杯には体部が外傾するⅤ・Ⅵ類もこの時代に存続する。杯の多様さからみると、酒ばかりでなく、飲茶などにも用いられた可能性があるが、決め手はない。高台付杯Ⅳ類Aらしきものを5個いれた瓷器の畚が劉宋441年の福州墓から出土。畚の初出例で、以後、例が多くなる。これを茶用とみる人もいるが、速断できない。高台付碗には、口縁が外反するⅥ類もある。蓋付の初出例でもある。羹あるいは粥用と推定する浅目の丸底碗Ⅳ・Ⅴ類、平底碗Ⅳ・Ⅴ類もあるが、前者の隋代の例では匕（匙）を伴った例もあり、飯用にも使用されたと推測される。鉢は、古い平底Ⅲ類や高台付Ⅱが残るが、新たに高台付Ⅳ・Ⅴ類が登場する。魁はⅡ類A・Bが6世紀中頃まで存続する。水をいれたと推測する盂は南北朝後期から深目のⅢ類になるが、扁平な短胴罐Ⅳ類はあまり変化せずに存続する。鉄鉢形は隋代に深目のⅡ類に変わる。

大盤は、新彊ではⅥ類Bの銀器があるが、中華には及ばない。他は、円案のⅤ類が存続する程度で、高台付のⅤ類Bが南北朝後期に出現する。中盤も好例はない。小盤は銘々皿のⅥ類が存続。高台を伴うⅥ類Bは5世紀後半頃からである。ササン朝ペルシャ産の北魏504年の大同出土鍍金銀器にうかがわれたように、西方からの影響があったのであろう。托は、承けが高いⅡ・Ⅲ類が、主に杯用として展開する。

豆は、南北朝前半期から隋代にかけて、Ⅰ・Ⅱ類が再び登場する。大型のⅠ・Ⅱ類は、隋代からで、杯・碗をのせた例が目立つ。盒も再登場する。円筒形のⅢ類Aや鼓形のⅣ類がある。前者は化粧用の粉盒であろうが、後者は水器かもしれない。高足香盒は南北朝後期から登場する。この時期には柄香爐も出土している。墓の被葬者は僧ではない。唐代の壁画資料からみても、官人が柄香爐を持つ例はあり、参詣や儀式などで使用した嚆矢と推測する。

漢代以来の鈁や球胴壺Ⅱ類が486年頃の北魏墓から唯一出土しているが明器であり、以後は途絶する。三国時代に登場した盤口の球・長胴壺Ⅲ類は形を変えながら存続するが、球胴壺Ⅲ類と盤口の細頸壺Ⅲ類は隋代頃に終わる。新種は、いわゆる玉壺春式の細頸壺Ⅳ類で、5世紀後半に出現し、唐代につづく。壜はガラス器かその模倣品で、Ⅲ類が6世紀前半から、袋状口縁のⅣ類が隋代に出現して、これも唐代につづく。短・長胴罐では直口で肩に四耳をもつⅤ類が南北朝後期に登場し、唐代に引き継がれる。

瓶は、反口瓶Ⅱ・ⅢA類が5世紀代、ⅢB類の系譜をひくいわゆる蕉形水瓶のⅣ類が6世紀後半、いわゆる王子形水瓶のⅤ類A・Bが6世紀前半に登場、盤口瓶Ⅰ・Ⅱ類も6世紀前半に登場し、盛期となる。6世紀前半には浅洗ⅢA類、6世紀後半には浅洗ⅢB類があり、上記の反口瓶Ⅳ・Ⅴ類も同じ墓から出土していることからセットであり、手を洗う礼器といえる。このことは唐代の絵画資料からも裏付けられる。なお、三脚付の深洗Ⅲ類が6世紀後半にあるが、浅洗と組み合うものではない。特殊例である。

鍋や釜・甑は若干の明器（鍔付き球胴釜Ⅱ類）がある程度で実態は不明。鐎斗はⅢ・Ⅳ類が存続、北朝・隋では特有の鍑が形を変えながらも存続（Ⅳ・Ⅴ類）する。

唾壺は、南北朝前半はⅡ類だが、6世紀中頃からは口縁が広くなるⅢ類に変わる。ともに落とし蓋を伴うようになるのは新しい要素の一つである。

熨斗は新種のⅣ類が6世紀中頃に登場する。爐は鐎斗と組むⅡ類が見当たらなくなる。爐の新器形は5世紀前半から登場する三脚鍋様のⅣ類A・B、鼎様のⅤ類で、ともに下盤を伴う。小型であり、香用の薫爐と推測する。Ⅴ類は隋代ですたれる。正倉院の火舎につながる環耳付の爐Ⅲ類Aは、6世紀後半が初現で、唐代につながる。これも香用の薫爐である。燈は豆燭・盞燈ともに丈の長いⅢ・Ⅳ類が南北朝後期に登場する。脚に太い突帯をもつ豆燈Ⅴ類Aは隋代にはじまり、蠟燭を中空柱に差し込む蠟燭燈Ⅱ類も確実には隋代にはじまり、ともに唐で展開する。

初・盛唐　この時代は、南北朝時代の後半に登場した器種・器形と隋代頃の新器形が展開する一方で、ササン朝ペルシャなど西方からの新しい影響が再度及んだ時期である。西方からの影響は、南北朝前半の5世紀代より強く、容器の形状は大きく変化する。その代表は、花形の高足杯、杯・碗・鉢、盤などで、7世紀代は鍍金銅器が主、8世紀に入ると銀器や鍍金銀器が主となる。波及の時期は、高足杯の一部は初唐でも古くなる可能性があるが、他は7世紀後半前後と8世紀中頃に登場してくる。貯蔵具や煮沸具なども7世紀後半前後と8世紀中頃が画期である。ただし、後でも触れるように、8世紀後半の良好例がないため、中唐への変遷は今ひとつ明瞭にできない。今後に期待せざるをえない。

飲器では、高足杯Ⅵ・Ⅶ類、把手付杯Ⅳ～Ⅶ類が新しく登場する。高足杯Ⅵ・Ⅶ類Aは初唐でも古く、7世紀後半～8世紀初にⅥ類B・CとⅦ類B、8世紀中頃にⅥ類DとⅦ類D・Eに変化するようである。把手付杯Ⅳ・Ⅴ類とその祖型と推測されるⅥ類A、それにⅦ類Aは7世紀後半～8世紀初、Ⅵ・Ⅶ類Bは8世紀中頃。7世紀後半には、把手付壺形杯Ⅲ類、楕円長杯、曲長杯もあり、前一者は8世紀中頃までだが、後二者は中・晩唐に展開する。耳杯は8世紀中頃に新式のⅣ類があるが、極めて稀で、以後は途絶えたようである。

杯・碗では、南北朝後期や隋代からの高台付杯Ⅳ～Ⅵ類、丸底碗Ⅱ・Ⅳ類、平底碗Ⅴ類、高台付碗Ⅳ・Ⅵ類が形を変えながら存続する。新器形の一群は花形の杯・碗や稜碗。花形杯Ⅰ～Ⅲ類、花碗Ⅰ・Ⅱ類が7世紀後半頃、花碗Ⅲ類が盛唐、稜杯Ⅲ類は8世紀前半。稜碗は深目のⅡ～Ⅳ類Aが7世紀末～8世紀前半で、8世紀中頃には浅目のⅤ類が登場する。通常の円形のものでは、口縁が強く外反する高台付碗Ⅶ類は、輪状撮みの蓋が伴う初出例でもあるが、時期が8世紀中頃前後に限られる。体部が直線的に開く高台付碗・杯Ⅷ類は瓷器のみだが8世紀中頃から、口縁が外反する丸・平底杯Ⅶ類や丸・平底碗Ⅶ類がおそらく7世紀末頃から登場してくる。鉢は7世紀中頃のやや早くに新式の高台付Ⅵ類が出現。平底鉢はⅤ類Aが初唐でも古く、Ⅴ類Bが8世紀初に出現し、中唐にも引き継がれる。鉄鉢形は8世紀初には底がやや尖り気味のⅢ類、8世紀中頃には尖底のⅣ類に変化。盂は南北朝後期のⅣ類が存続するが、これに似た短胴罐Ⅳ類は初唐でも早い時期に終わる。魁は、新式のⅢ・Ⅳ類が8世紀に出現するが、中唐では途絶える。

托では良好な例がない。盤では古式の中盤Ⅴ類や小盤Ⅵ類Aが7世紀後半～8世紀初頃まで残る。唐代の絵画資料からすると、これらが托にも用いられた可能性がある。大盤Ⅵ類Cは多数の杯をのせる器台として用いられる。盤の新器形は花形で、大・中盤は三脚付花盤Ⅱ類A・

Bが8世紀中頃、中盤の長方形花盤Ⅰ類が7世紀後半～8世紀初頃、小盤は花盤Ⅰ類が7世紀後半頃、Ⅲ類が8世紀中頃と盛行する。大・小盤では円形のⅥ類C、小・中盤ではⅦ類が8世紀初頃から盛行するが、三脚付盤は盛唐で終わってしまうようである。円形の小盤Ⅵ類Cは、7世紀中頃に登場し、銀器では内底に虎らしきを飾ることからササン朝ペルシャ産とみている。

豆は7世紀代に若干の資料があるが、以後は再び目立たなくなる。盒は薬石などをいれた円筒形のⅢ類Aが残るが、化粧用の粉盒は8世紀に入ると、貝形Ⅴ類、花形Ⅵ類などと多様になる。高足香盒は、8世紀中頃には蓋に相輪状の撮みがつくⅢ類、いわゆる塔鋺に変わる。

壺類は、いずれも瓷器か陶器で、長胴Ⅱ類A、Ⅲ類B・Cが7世紀代に残る程度だが、Ⅱ類の系統は8世紀初から、蓋に相輪状の撮みをもつ蓋と器台がセットになった、いわゆる塔式罐と呼んでいるⅡ類Bが盛行し、以後にもつづく。細頸壺は玉壺春式のⅣ類Bと反口のⅤ類、壜は隋からのⅣ類やⅡ類A・B、罐も南北朝後期・隋からの球胴罐Ⅳ類Aや長胴罐Ⅴ類Aなどが存続する。瓮には珍しくも銅器が数点あり、晩唐の銅器に「酒瓮」とあることから、特に酒貯蔵用と意識されたことが窺える。

瓶は、いわゆる蕉形水瓶形のⅣ類が7世紀末頃まで、王子形水瓶形のⅤ類Cが8世紀中頃まで残る。新器形は球胴・長脚のⅥ類で、7世紀後半～8世紀初に登場。浄瓶も新器種で、8世紀前半がⅠ類、8世紀中頃にⅡ類に変化する。浄瓶は、僧侶の携帯品とするのが一般で、Ⅱ類も僧・神会の持物だが、Ⅰ類を出土した墓の被葬者・王仁波は俗人である。ただし、王仁波は仙境を好んだ節があり、その折りの携帯品かもしれない。瓶Ⅴ類は、既述したように開元・天宝年間（713～755）の敦煌・莫高窟の絵画資料（第12図2・3）では、浅洗Ⅳ類らしきものの上において捧げ持つ参詣団があり、手を洗ったりあるいは剃髪に用いる儀式具であったことが知れる。浅洗は7世紀後半頃から登場し、形を変えながらも中・晩唐につづく。墓の出土例をみると、瓶Ⅳ・Ⅴ類と伴出した確実な例はなく、礼器としての意識は薄れて、洗は手や顔を洗う器、瓶は水をいれたり、時に花瓶としてそれぞれ単独に用いられたのではないかと推測する。

有柄注壺は、口縁に片口をつけたⅣ類が形を変えながら盛行する。ワイン用であろう。柄がないⅣ類も出土数は少ないがある。新器形は頸が長い反口の長胴壺に注口と把手をつけた有柄注壺Ⅴ類AとⅥ類Aで、前者は8世紀初から、後者は8世紀中頃から登場する。特に後者は、中・晩唐の主流を占め、茶用を含むことも明かである。他に短胴罐に注口をつけた水注、有柄壺Ⅱ類、双柄壺Ⅰ・Ⅱ類があり、以後も細々とつづく。碗形匜は8世紀中頃に登場するが、前漢の礼器の復古ではなく、実用的な酒や水の注器、日本でいう片口とみるべきであろう。

釜・甑は副葬品がほとんどなく、鍔付きの球胴釜Ⅱ類が存在していたことを知る程度である。鐎壺は、復古的なⅠ類系統の明器が7世紀にあるが、以後は途絶える。鐎斗は古式のⅡ・Ⅳ類が残るが、前者は明器、後者も小型で薬用。実用具としては新式のⅤ類A・Bが8世紀前半に登場するが、以後は廃れる。この時代は、新式の提梁鍋Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類、三脚鍋Ⅲ・Ⅳ類が盛行する。多くは内耳をもち、以後にもつづく。提梁罐は初・盛唐に限ってみられるが、その一部は中国北半部に特徴的な鍑を継承した可能性がある。初唐の壁画では、提梁罐を左手、角杯を右手に持った例があり、提梁罐が温酒器であったことを物語る。8世紀前半には三脚罐も登場する。小型品の一部は薬石の容器らしいが、前漢代の鐎尊に似たものもあり、宴会などで食物を温める器として用いられたとも考えられる。

熨斗は明器として古式のⅢ類がある程度だが、実用具は存在したはずである。唾壺は、盤口だが、口縁端が大きく開くⅣ類にかわる。爐は、古式のⅣ類A・Bのほか正倉院の火舎ともつながるⅢ類C・Dがあり、以後にもつづく。燈は、南北朝後半の豆燈Ⅱ類、隋代の豆燈Ⅴ類と蠟燭用Ⅱ類が形を変えながら存続する。盞燈は、Ⅲ類がなく、8世紀中頃には1個の内耳をもつⅥ類が登場し、以後にもつづく。

中・晩唐～五代・十国時代　既に触れたように、8世紀後半の良好な資料が少ないため、盛唐の諸器種・器形がいつまで残るのかは判然としない。中唐でも9世紀前半の諸資料は盛唐とは大きく異なり、8世紀後半が画期になると予測できる。中唐と晩唐の境は、通説に従い835年としたが、容器類で見ると850年頃が画期といえる。金属器は、中・晩唐では鍍金銀器が主となる。五代・十国時代は、晩唐から北宋への過渡期であり、茶用と推測する有柄注壺Ⅷ類とその温器である花形鉢Ⅱ類など北宋で展開する容器の出現があった。

飲器では、高足杯が遅くとも9世紀中頃に花形のⅧ・Ⅸ類にかわるが、例は少ない。把手付杯や角杯は出土例がなく、曲長杯が主となる。典型的な長曲杯は10世紀初まであり、楕円長杯を花形にした花形長杯は多く、9世紀前半から9世紀中頃まではあるが、ともに五代・十国時代にはつづかない。高足杯Ⅷ類A・Bや花形長杯にも、後述するように托が伴うことは新要素である。

杯は、古式のⅣ類Aが五代まで残り、他のⅣ類やⅥ類も形を変えながら存続し、以後にもつづく。花形杯は晩唐末から五代・十国時代に深目のⅢ類があるが、その上限は不明。瓷器に限られるが、体部が直線的に開く高台付杯・碗Ⅷ類は8世紀後半からあり、北宋にもつづく。碗では、盛唐に登場した丸・平底碗Ⅶ類が、遅くとも9世紀中頃からは体部が強く外傾するⅧ類に変わる。高台付碗は、8世紀中頃に登場した浅目のⅠ類Dの系譜をひくⅠ類E・Fと、口縁が強く外反・外折するⅦ類Cが9世紀前半から五代・十国時代まで存続する。口縁が外反するⅥ類も五代・十国時代につづくが、Ⅵ類Bの銀器は「宣徴酒坊」の刻銘があり、飲酒器らしい。高台付の花碗は、盛唐に比して体部の外傾するⅣ類が9世紀後半頃にあり、北宋につづくが、これも上限は不明。

鉢は初・盛唐に登場した平底鉢Ⅴ類が五代・十国時代まで形を変えながら残るが、以後はすたれる。瓷器に限られるが、古式の平底鉢Ⅲ類系統に高台をつけたⅤ類が中・晩唐にある。鉢の新器形は9世紀後半に登場する花形鉢Ⅰ類で、蓮葉形の蓋を伴う。五代・十国時代に登場する花形鉢Ⅱ類は茶用と推測する有柄注壺Ⅷ類の温器で、北宋に主流となる。鉄鉢形は尖底のⅣ類が中唐、Ⅴ類が9世紀後半にあるが、以後はすたれた可能性がある。盂は9世紀前半にⅥ・Ⅷ類に変わるが、これも北宋には途絶えてしまう。

托は、底を窪ませた特有なⅢ類が9世紀前半末頃、ほぼ同巧ながら花形にした花形托Ⅰ類が9世紀後半に出現し、後者は五代・十国時代のⅡ類をへて、北宋にも存続する。花形托Ⅰ類には「茶庫（中略）拓子」の刻銘があり、寸法から杯でなく碗を飲茶器として用いたことが知れる。寸法の小さい托Ⅲ類や花形托は高台付杯Ⅳ類やⅧ類をのせたことも出土例からはわかるが、これで何を飲んだかは、なお断定できない。専用托の盛行によって、中・小盤を托とすることはなくなったと考える。

茶道具は、後述する有柄注壺Ⅵ類が「茶杜瓶」で、茶をひいた碾は830年頃からあり、茶を

納めた箱は874年にある。「茶托」の存在と合わせて、9世紀前半には飲茶の風が盛行していたことが容器から画定できる。飲茶はすでに後漢末には始まっているが、唐代までの間にどのように普及したかは、なお今後追求すべき大きな課題といえる。

盤は、大盤では盛唐の三脚付花盤Ⅱ類A・Bと異なって、三脚がつかず、文様も異なる花盤Ⅱ類Cが8世紀後半にあり、盛唐からの変遷が知れる。この系統は9世紀までつづかない。中盤では、四花形の花形長盤Ⅱ類Aが9世紀前半からあり、9世紀後半～10世紀初には菱花形の花形長盤Ⅲ類も加わるが、五代・十国時代には途絶える。小盤では、古式の花形盤Ⅱ類A・Cが晩唐や五代・十国時代に一部残るが、8世紀後半に花形盤Ⅳ類、9世紀中頃には花形方盤が登場する。前者は北宋につづくが、後者は五代・十国時代ではすたれるようである。円形の中・小盤Ⅶ類は9世紀前半にはすたれるが、9世紀後半にはイスラムからのガラス器が流入したことなどが注目される。粉盒は、盛唐からの伝統が残るが、9世紀中頃から隅丸方形や楕円形のⅦ類、9世紀後半には蝶形のⅧ類が登場する。花形は9世紀中頃から台付きのⅥ類Bが新登場するが、台のないⅥ類Aも存続し、やがて北宋を代表する菊花形の香盒につながることになる。

壺類は、球胴壺の新種であるⅥ類の金器が9世紀後半にあり、長胴壺のⅡ類Bが中・晩唐にも盛行するが、五代・十国時代にはすたれたことを示し得る程度である。瓶は、古式の反口瓶Ⅴ・Ⅵ類が中・晩唐まで残るようだが、以後はすたれる。盤口瓶は晩唐にあり、北宋にも細々と残る。新種は体部に面取りを施して八面体とした直口瓶Ⅲ類が、9世紀後半から五代・十国時代まである。壜はⅢ・Ⅳ類がそれぞれ8世紀後半と9世紀後半にあり、北宋にもつづく。罐はあまり変化しない長胴罐Ⅱ類や瓮が存続。洗は、盛唐からのⅣ類が9世紀中頃までで、まもなく花形洗Ⅰ・Ⅱ類に変わるようである。

片口の注壺と有柄注壺Ⅳ類は中唐にあるが、前者は9世紀中頃、後者は晩唐～五代ですたれる。盛唐に登場した有柄注壺Ⅴ・Ⅵ類は五代・十国時代まである。主流はⅥ類で、9世紀中頃に注口が短いⅥ類Aから注口の長いⅣ類Cにかわり、後者が北宋につづく。808年のⅥ類Aには「茶杜瓶」、872年のⅥ類Cには「宣徽酒坊」の刻名がある。Ⅵ類は茶用であり、酒用でもあったことになる。新器形は晩唐874年頃の法門寺出土有柄注壺Ⅶ類、五代・十国時代の有柄注壺Ⅷ類。前者は密教系法具で、いわゆる浄妙寺形水瓶の原型になる。後者は、既に触れたように茶用と推定できるもので、北宋で盛行する。

釜・甑は、副葬品がなく、実態をつかめない。鐎斗は脚を省略した有柄鍋にかわる。有柄鍋は824年が初出で、北宋にもつづくが、上限は不明。盛唐に登場した提梁鍋Ⅲ類が9世紀前半や後半、三脚鍋Ⅲ類は8世紀末～9世紀後半の資料があり、ともに北宋にもつづく。三脚罐もⅡ～Ⅳ類が9世紀初～10世紀初にあり、相似た三脚壺も9世紀後半にあるが、以後は途絶えてしまう。

熨斗は8世紀後半～新代のⅣ類が登場する。以後もつづいたはずだが、出土例はないようである。唾壺は9世紀初に、それまでの盤口から漏斗状のⅤ類にかわり、五代・十国時代には存続するが、北宋の確実な出土例はなく、その後の状況は明かでない。爐はいずれも薫爐で、古式のⅣ類が形を変えながら北宋にもつづく。Ⅲ類も9世紀後半にあるが、この時期には風爐とも呼ぶ大型の爐（薫爐）Ⅴ類が登場し、北宋にもつづく。燈では豆燈Ⅴ類が8世紀後半にある。

5　小結

晩唐や五代・十国時代の資料は不明だが、北宋では多様に展開し、いわゆる金山寺形香爐になると推測する。蠟燭燈Ⅱ類も五代・十国時代までは存続する。盞燈はⅥ類が晩唐～五代にあるが、以後は出土資料がない。杯や碗が盞燈として転用されたのであろう。

註

1）王振鐸（文献301）も同じ。ただし、円筒形かは断言できない。
2）桑山正進（文献43）によれば、扁壺は楹、椑は俵形のようである。
3）銅鋬の編年は、陳文領博（文献261）が詳しい。
4）鐎尊の器形で、口縁端に方形把手をつけた陶製品は、前漢前期の広州漢墓（文献４）、新代の山西・朔県（文献363）から出土している。
5）現在のような柱状の蠟燭でなく、餅状の塊をもちいたとする見方（文献43参照）があるが、後述するように、隋・唐代には柱状蠟燭があり、それが漢代に遡る可能性もある。
6）鍑の編年は文献200などにある。
7）托Ⅰ類は南北朝中・晩期（文献188）まで残る。
8）同類の陝西・法門寺塔地宮出土ガラス器（文献370）は５世紀とみている。
9）河北・邢窯出土瓷器（文献367）には、隋代とみる有柄注壺Ⅳ類があるが、他に古い例はない。後考をまつ。
10）西安市城建局の花形長盤（文献16）は、詳細不明ながら758～774年という。